

鉄齋美術館開館35周年記念特別展
宝塚市立図書館聖光文庫開設35周年

鉄齋 —用印のすべて—

2010年9月7日(火)～12月12日(日)

第1回：9月7日(火)～10月3日(日)

第2回：10月7日(木)～11月7日(日)

第3回：11月11日(木)～12月12日(日)

10時～16時

月曜日休館 但し9月20日、10月11日(月)は開館 翌日休館

10月4日～6日、11月8日～10日は展示替のため休館



印201 頼山陽刻「山碧水明」印 鉄齋箱書
辰馬考古資料館蔵



鉄齋用印50顆 (385顆のうち)

最後の文人と謳われる富岡鉄斎（1836～1924）は多癖の人として知られ、自らもそれを誇りとしていた。とりわけ印癖は有名で若い頃には篆刻家を志し、晩年には「余に印癖有り」と語り、雅趣に富む多くの自刻印を遺している。鉄斎美術館では「鉄斎一印癖を娛しむ」と題する展覧会を4回に亘って開催してきた。その第4回展（2008年）では用印53顆を作品とともに展示することができ、鉄斎の研究にとって印癖、用印の研究の重要性を再確認させられた。

本年、当館は開館35周年を迎え、その記念展の掉尾を飾る企画が「鉄斎一用印のすべて」展である。開館以来、先達の研究を踏まえ主に作品に見られる印影を中心に、鉄斎作品の制作年代の判別や真贋の判断に深く係わる用印の調査研究をしてきた。その集大成として本展では、鉄斎が大正13年に没した時に手元に遺されていた印385顆のすべてと、それらが捺された作品とともに展示する。用印の中には今のところ、用例が確認されていないものも含まれている。

さて、若い頃に篆刻家を志し、生涯篆刻を自らの楽しみとしていた鉄斎が遺した用印は、優に500種を超え、なかには鉄斎の意によって破棄されたものもある。鉄斎の印癖の最大の特徴は1万点ともいわれる作品の一つひとつに、愛蔵する数多の落款印や遊印の中から鉄斎自らが選んだ印を手ずから捺していたことにある。その印影は画賛と緊密に係わり合い、一体となって作品をいっそう充実感あふれるものになっている。

そもそも鉄斎の印癖はどのようにして育まれたのであろうか。幕末から明治、大正時代の文人、学者あるいは政治家など知識人の間では詩書画はもとより篆刻をも嗜むのが常であった。鉄斎もそうした中で青年期を過ごし、共に国事に奔走し精神的にも大きな影響を受けた山中信天翁、板倉槐堂、江馬天江等の師友たちも篆刻に巧みで、鉄斎のために印を刻して贈り、鉄斎はそれらを晩年まで愛用している。若い頃、篆刻家を志した鉄斎は高価な清の段玉裁の『説文解字注』の原刻本を無理算段して買い求め、その後も『積古齋鐘鼎彝器款識』（清・阮元）や《古今引例》（曾根寸斎・1841）など、和漢の印譜を多数所持し晩年まで金石学や印章について研究の手を休めることはなかった。文久年間に長崎へ旅行した際、世話になった小曾根乾堂は璽印を刻した篆刻の名手であることから、何らかの影響を受けたことは想像に難くない。後に鉄斎は乾堂から「思嗜廬主」印（印16）を贈られ愛蔵していた。この旅行中に手に入れた「千人万人中式人半人知」印（印310）は生涯愛用することとなった。

幕末から明治初めの京都では政府から印司に任命されて官印を刻した中村水竹や、璽印の金印を刻した安部井樸堂が活躍していて、鉄斎は彼等が刻した落款印を愛用した。篆刻家として立つことは断念した鉄斎ではあったが、篆刻の鑑識眼は大いに磨かれ、明治28年（1895）に京都で開催された第4回内国勸業博覧会では審査官に任命され、篆刻の審査をしたほどであった。

次に鉄斎の用印について見ることにする。その落款印や遊印は書体はもちろんのこと、遊印に見られる風流閑雅の詩や句の一節、吉語、格言、箴言、図像などには古今和漢の印章や篆刻の書を涉獵して得た該博な知識と教養、そして中国の文人に対する尊敬と憧憬を見ることができる。これら用印の印材は寿山石、扶桑木、玉、水晶、銀、銅、陶磁、琥珀、古墨、竹根、南瓜の蒂などのほかに、古社寺の遺材なども見られ、鉄斎の嗜好の一端が窺えて興味深い。陶磁印の多くは初代三浦竹泉、四代清水六兵衛、初代諏訪蘇山が造している。印章の鈕や姿もまた変化に富み、造形的に面白く見る者を魅了して止まない。

その刻者は、日本の篆刻界を代表する印聖高芙蓉をはじめ池永一峰、源伯民、趙陶斎、池大雅、頼山陽、磁印の名手田辺玄々、鉄斎の用印の内79顆を刻した桑名鉄城、37顆を刻した園田湖城、8顆を刻した奥邨竹亭があり、鉄斎の師友山中信天翁や晩年の友西園寺公望、黒川魁亭、長尾雨山など、それは篆刻家として一家を成した人だけにとどまらない。中国においても明の文彭、何震のほか清の文人画家高鳳翰、金石学者羅振玉や西泠印社を主宰した呉昌碩、民国の趙叔樞、錢瘦鉄など名手の名がある。和漢の刻者の顔ぶれは極めて多彩である。

鉄斎の用印は自ら刻した51顆のほか、永い生涯に多くの知友から贈られ、鉄斎の喜寿や米寿を祝して鉄城や湖城から贈られ、あるいは鉄斎の印癖が知られるようになると中国土産の古印など自然にその手元に蒐まり、夥しい数になっていったのである。

頼山陽刻「山碧水明」印（印201 辰馬考古資料館蔵）は鉄斎が大正3年（1914）に西宮の酒造家辰馬家で《阿倍仲麻呂明州望月図・円通大師具門隱栖図》（重要文化財）を制作した際に捺された。同10年に辰馬悦叟が没した時、墓碑銘を撰して揮毫した鉄斎は潤筆料にこの印を切望した。そこで両家相談の上表向きは鉄斎に贈呈し、没後に辰馬家へ返却することとした。そうとは知らない鉄斎は大いに喜び、その箱に「頼翁鑄印」と書しさらに自身の手に帰することになった経緯を記して愛蔵し、多くの《頼氏山紫水明莊図》（No51）、《山紫水明処図》（No66）などを描き、「山碧水明」印を捺して得意であった。年を重ねても衰えぬ好奇心や所有欲を表わすこの逸話は、鉄斎の印癖の極みといえるのではないだろうか。

こうした鉄斎の印癖を知る多くの人々が鉄斎用印の印譜を求め、鉄斎は《鉄叟所用印影》（No10）、《鉄老斎印景》（No15）、《賜楓書樓印譜》（No21）、などを作成して応えた。自身のためには《文人多癖印譜》（No28）を作成し、それらには刻者や印材、伝来などが識され貴重な資料となっている。

今回、鉄斎の用印の落款や印章の箱書、あるいは遺された印存を調査することにより新見地を得ることができた。そして我々はあらためて鉄斎にとって用印の印文、書体、刻者、由来、伝来、印材、印姿、印風など何れも重要な意味を持っていることを知り、その方寸の世界から鉄斎の人生観や価値観、人間性までもが発せられていることを理解するのである。

鉄斎の書画に捺された印影、印姿を愛で作品とともに用印の全貌を楽しんでいただければ幸いである。（奥田素子）

尚、宝塚市立図書館聖光文庫は昭和50年（1975）に清荒神清澄寺鉄斎美術館「聖光殿」が開館するにあたり、その入館料の全額を美術図書館購入基金として宝塚市に寄贈することとして設立され、本年聖光文庫も35周年を迎えた。それを記念して聖光文庫においても下記の企画を催している。

「聖光文庫と鉄斎美術館の歩み」 会期 平成22年10月16日(土)～12月9日(木)

富岡鉄齋宛園田湖城書簡

1 大正七年十一月二十四日

拝啓 昨夜友人より
承り候処 桃華先生
には御病氣御臥床之由
御容体ハ如何に御座候や
老先生始め皆様にも御
心痛之御事と拝察仕候
早速参堂御見舞可申上候
処却而御取込中御妨
致し候ても如何と存差控
申候 別封小包郵便にて
平安印集三部贈呈致候
御一咲被下度候 猶御老休
御看護之御疲勞之出ませぬ
様御身御大切ニ被成度候 勿々頓首
十一月廿四日 園田穆 再拝
鉄齋老先生 台下

〔封筒表〕

市内室町通中立売上

富岡鉄齋先生 惠展

(消印 七年十一月二十四日)

〔封筒裏〕

十一月念四

園田湖城 敬緘

(住所印 京都寺町綾小路南)

2 大正九年十月十七日

肅啓 兼探求之天明

版平安人物志御惠投

歎喜無尽頭謝之至りに

御座候 昨朝六角会館

古書展覽会へ先生御帰館之後ニ参り候 然して

高芙蓉鈎摹正面版之

蒼蠅賦一書購申候

借亦甚御面倒乍ら

御高作之瀟相夜雨因匣

題成被下度猶円窓之

余白へ瀟相之詩御添願

度と申参り候 迂生所得之

芙蓉山水匡題願度候

南紀友人より可珍古谷石

贈り呉候ニ付而ハ恐縮之至

候へ共 銘を願度卑願

御許容之程懇願仕候

始て小印二刀を刻候 御一

咲被下度候 詩箋少々

封筒御叱留相成度候

印章備考御発

見之節ハ何卒借

覧之程御許被下度候

本日上海より雲荘印

話送り来り候 先生にハ

御覽ニ相成候や伺申候

毎時御多用中を不願

御妨致候段御寛恕願上候

十月十七日 園田穆 頓首 再拝
鉄齋老先生 尊前

〔封筒表〕

富岡鉄齋老先生 尊前

〔封筒裏〕

十月十四日

園田湖城 敬緘

3 大正九年十二月十一日

拝啓 追日寒冷相増候 御起居如何被在候や 御伺申上候

御愛蔵之轆耕録永く拝

借奉謝候 伝国璽及剛印

二事写畢候 御返璧致候 御

落手相成度候 拙篆一

章御笑存被下度候 何

万縷御札申述候 不取敢御返璧迄 早々頓首

十二月十一日 園田穆

鉄齋老先生 虎皮下

先日ハ竹雲居士追悼紀念

扇御惠贈被下厚く御札申候

是延引御寛恕祈候 穆 再白

〔封筒表〕

富岡鉄齋老先生 惠展

〔封筒裏〕

十二月十一日 園田湖城 敬緘

4 大正十年四月十一日(1)

拝啓 拙篆蘇書寮印ハ

先生之書庫ニ多数蘇文忠公

書籍御取蔵因て蘇書寮之名ありと聞き刻候処 唯今曾て

賜り候東坡笠履匣匣裏ニ聚

蘇書寮とあり大驚申候 就而ハ改

刻致度候ニ付此使ニ御渡し被下度候

高芙蓉刻足立山印石四面



印135 「聚蘇書寮」園田湖城刻

蠟墨ニ摺候処凸凹之為不鮮
明ニ付墨拓可致候 一兩日御猶
豫願上候 早々何卒拙作印御
渡被下度懇願致候
十一月十一日 園田穆 頓首
鍊齋老先生 侍史

〔封筒表〕

富岡鍊齋老(先)生 尊前

〔封筒裏〕

四月十一日

園田湖城 敬緘

5 大正十年四月十一日(2)

拝啓 本日拙篆聚ヲ聚ニ

誤りしを發見 使差出候 只

今尊書拜受種々御教

示御厚情之程奉多謝候

過日内藤博士を訪問種々高

談拜聴 其席上某氏ありて

老先生之御尊に蘇書之取

蔵ニ富せられ眾蘇書寮云云の
話しに因り刻致候次第第二御座候
早々改作御批正可願候 早々頓首
四月十一日 園田穆 再拜
鍊齋老先生 尊前

〔封筒表〕

市内室町中立売北

富岡鍊齋先生 尊前

〔消印〕 十年四月十一日

〔封筒裏〕

四月十一日

寺町綾小路南 園田湖城

6 大正十年五月一日

拝啓 過日は菖蒲節句に

献菖蒲因御恵賜二預り大慶

次第御座候 厚く御礼申述候 御用ヒの

國 此印は古印二御座候や 御教

示願上候

且又海苔御恵贈奉謝候

昨日支那ヨリ帰來之友人に

会候処元銅印數十顆所持致居

内〔圖〕字印及魁星之印有之

割愛を受申候 御笑留被下候ハバ

幸甚二御座候 并二粗箋到來のもの

御目二懸候 延引乍ら御礼迄 早々

五月一日 園田穆 頓首

鍊齋先生 尊前

〔封筒表〕

富岡鍊齋老先生 尊前

添銅印及粗箋

〔封筒裏〕

五月一日 園田湖城 敬絨

7 大正十年九月二十日

拝啓 秋気爽涼

相覚候処愈御視安

珍重奉賀候

新秋と共に二拝趨

御高話拜承御伺申度

存居候へ共 霽々莊藤

井氏所藏之古印

編纂二通居御無

沙汰致候 御寛懇願上候

却説亦甚申兼候へ共 知人

なる御影堂扇舖主人

先般來度々参り

老先生二營業用之

画扇御揮毫御願申

呉れとの懇願二有之候

御多用中恐縮之次

第二候へ共特別之

思召を以て御一揮被下候ハバ

扇舖之光栄ハ申二不及 小生も

面目を施可申何卒

御快諾被下度懇願致候

因題ハ如何様ニても不苦

候へ共 可成ハ山水を希望也

金沓封及糊并嵯峨

定家卿愛樹之紅葉を

挿入せる扇子扇子掛相添候 御落

掌被下度候 小生

且て賜り候魁星因成装

候二付御序之節題匣願上候

九月廿日 園田穆 頓首

鍊齋老先生 尊前

〔封筒表〕

富岡鍊齋老先生 尊前

〔封筒裏〕

九月廿日 園田穆 敬絨

〔別紙〕

園田先生

謹啓

過日来再三御伺致候処何日も

御不在にて残念ニ存候 実は

甚御迷惑なる御願二候へ共 小店

營業用に鍊齋先生ノ画扇

製作致度心懸居候へ共 好き

勝手も無之心痛致居候

付ては御懇意ニ甘へ申兼候

へ共 鍊齋先生へ御頼み被下度

平二懇願之次第第二御座候

別封扇面相添置候 万事御

取計何卒宜敷御願申上候

先ハ寸楮を以て御願迄

如斯二御座候

大正十年九月十七日

宣阿弥拜

8 大正十三年七月十五日

拝啓 灼熱之候 愈御健勝

欣賀之至御座候 当方羅出之処

御使二預り且重宝之品々御恵賜

御懇情難有御礼申上候 次ニ

御下命之香木印ハ数日之

内二刻成御批正を可乞候

此義御諒承成被下度候 不取敢

拝受御礼而已 草々頓首

猶此品甚失礼に候へ共御笑納

被下度ハ幸甚

七月十五日 園田穆

鍊齋老先生 尊前

〔封筒表〕

富岡鍊齋老先生 尊前

〔封筒裏〕

封 園田湖城 敬絨

七月十五日

ここに紹介した八通の書簡は、篆刻家・園田湖城（一八八六〜一九六八）から富岡鍊齋宛てられたものである。鍊齋が湖城に宛てた書簡四七通は、すでに紹介されており（神野雄二「富岡鍊齋研究―園田湖城宛書翰」修美社 一九九三）、それに往復する内容を断片的ではあるが知ることが出来る。

年齢差五十歳になる二人の交際のはじまりは、京都帝国大学文科大學講師を務めていた鍊齋息謙蔵（号桃華）を通じてであった。湖城が興した平安印会主催による大正三年の高芙蓉百三十年祭には、鍊齋自ら湖城宅に所蔵作品を持参したという。互いに親交を深めつつも、鍊齋が湖城の刻した印を用いるようになるのは、大正九年頃まで時間を要した。

書簡からは文人画家・学者として大成した鍊齋の胸を借り、三十代の湖城が臆することなく印章に関する談義や書籍の貸借を交わし、自ら刻した印を贈って、その謝礼に貰った作品に賛文や箱書を依頼している様子が窺える。

鍊齋が古印に造詣の深い湖城を好ましく思っていたことは、遺された三七顆の印からもわかるだろう。これは桑名鉄城の七九顆に次ぐ多さである。

なお、鉄齋宛の湖城書簡はほかに、鉄齋の筆録に印存とともに貼られたものも遺っている。それらについてはまた別に紹介する機会をもちたい。

（柏木知子）

《出品目錄》

No.	名 稱	制 作 年		年齡	本 紙 寸 法	材 質 · 彩 色	員 數
1	壳柑者図	明治5	1872	37	148.5×49.5	紙本 淡彩	1幅
2	三津浜漁市図	明治8	1875	40	180.2×81.9	紙本 淡彩	1幅
3	我愛吾廬図	明治10	1877	42	163.8×52.2	紙本 着色	1幅
4	淡彩山水図	明治11	1878	43	149.7×68.0	紙本 淡彩	1幅
5	通天紅葉図	明治15	1882	47	138.4×55.0	絹本 着色	1幅
6	楠公訓子図			50代	118.1×35.4	絹本 着色	1幅
7	富貴国香図			50代	117.0×48.6	絹本 着色	1幅
8	寿山福海図	明治32	1899	64	各127.8×50.1	絹本 着色	3幅
9	五岳真形図	明治36	1903	68	31.1×140.8	紙本 着色	1卷
10	鉄叟所用印影 乾坤	明治37	1904	69	各26.4×18.9	紙本 墨書	2帖
11	七福遊戲図			60代	30.0×192.8	紙本 着色	1卷
12	宗旦狐図			60代	136.5×31.2	紙本 淡彩	1幅
13	百事如意図			60代	42.0×97.6	絹本 着色	1面
14	松花堂幽居図			60代	124.0×29.0	紙本 淡彩	1幅
15	鉄老斎印景	明治38	1905	70	各177.3×30.9	紙本 墨書	2幅
16	楽此幽居図	明治39	1906	71	154.0×48.8	紙本 着色	1幅
17	飲中八徳図	明治39	1906	71	148.0×53.4	紙本 淡彩	1幅
18	雲龍図	明治44	1911	76	138.5×51.2	紙本 淡彩	1幅
19	庸軒茶博赴堅田詩幅・同図	明治44	1911	76	各113.5×29.8	紙本墨画 墨書	2幅
20	人生行楽図	明治44	1911	76	124.8×40.6	紙本 墨画	1幅
21	賜楓書楼印譜	明治44	1911	76	各26.8×15.4	紙本 墨書	2冊
22	薬王菩薩像	明治45	1912	77	151.5×41.6	紙本 墨画	1幅
23	武陵桃源図	大正元	1912	77	130.1×45.0	紙本 着色	1幅
24	黄不動明王画像	大正2	1913	78	135.3×50.8	絹本 着色	1幅
25	静楽帖	大正2	1913	78	各径14.3	紙本 着色	1帖
26	鍾馗騎虎図	大正3	1914	79	136.4×54.8	紙本 着色	1幅
27	鯉魚図	大正3	1914	79	143.8×40.7	紙本 墨画	1幅
28	文人多癖印譜(第一・第二)	大正3	1914	79	各26.8×15.4	紙本 墨書	2冊
29	高芙蓉逸事卷	大正3	1914	79	24.0×804.0	紙本 墨書	1卷
30	耶馬溪図			70代	71.3×94.5	紙本 淡彩	1幅
31	慈能制猛図			70代	122.5×34.0	紙本 着色	1幅
32	高遊外壳茶図			70代	132.2×42.2	絹本 着色	1幅
33	佳実図	大正4	1915	80	129.4×29.9	紙本 着色	1幅
34	萬歳二大字書	大正4	1915	80	199.5×89.2	紙本 墨書	1幅
35	慎忍書	大正5	1916	81	41.5×131.5	絹本 墨書	1面
36	猛虎図	大正6	1917	82	141.8×53.3	紙本 着色	1幅
37	聚沙為塔図	大正6	1917	82	73.2×66.0	絹本 着色	1面
38	造物画師哉書	大正6	1917	82	32.8×37.9	紙本 墨書	1幅
39	真兒戲小卷	大正6	1917	82	9.2×226.5	紙本 墨書	1卷
40	煙雲供養幀 聯添	大正7	1918	83	133.0×45.5	紙本 着色	3幅
41	大布放賭図	大正8	1919	84	136.4×35.3	紙本 着色	3幅
42	伏魔大帝関雲長像	大正8	1919	84	155.7×46.6	紙本 着色	1幅
43	懷素書蕉図	大正9	1920	85	129.1×31.7	紙本 淡彩	1幅
44	漁陽清忙図	大正9	1920	85	132.0×32.1	紙本 淡彩	1幅
45	蓬萊群僊会図	大正9	1920	85	190.5×58.4	紙本 淡彩	1幅
46	懶殘喫芋図	大正9	1920	85	130.8×32.1	紙本 淡彩	1幅
47	南極寿老星図 祝寿聯添	大正9	1920	85	132.5×52.0	紙本 着色	3幅
48	撥墨山水図 園田湖城苑書簡添	大正9	1920	85	径57.0	絹本 墨画	1幅
49	桃花図 蓮月短冊貼交	大正9	1920	85	52.0×58.6	紙本 淡彩	1幅
50	須耐煩書	大正10	1921	86	36.9×113.8	紙本 墨書	1面
51	頼氏山紫水明荘図	大正10	1921	86	28.8×41.7	紙本 墨画	1幅
52	瀟父会飲図	大正11	1922	87	132.6×32.1	紙本 着色	1幅

53	売書船図	大正11	1922	87	130.0×32.1	紙本	淡彩	1幅
54	一瓢千金図	大正12	1923	88	133.0×32.2	紙本	淡彩	1幅
55	瓢中快適図	大正12	1923	88	132.2×31.8	紙本	淡彩	1幅
56	雲山化城図	大正12	1923	88	133.5×33.5	紙本	墨画	1幅
57	鏡瀑滌心図	大正12	1923	88	131.8×32.0	紙本	墨画	1幅
58	宮比福御影	大正12	1923	88	128.5×32.2	紙本	淡彩	1幅
59	印癖巻	大正12	1923	88	31.1×132.4	紙本	墨書	1巻
60	寿老人像	大正13	1924	89	134.6×33.2	紙本	着色	1幅
61	葡萄苑図	大正13	1924	89	132.8×32.1	紙本	淡彩	1幅
62	普陀落山観世音菩薩像	大正13	1924	89	89.3×32.8	紙本	淡彩	1幅
63	聖者舟遊図	大正13	1924	89	143.8×39.6	紙本	淡彩	1幅
64	千歳桃園	大正13	1924	89	131.8×33.3	紙本	着色	1幅
65	天間独立禅師肖像	大正13	1924	89	137.2×53.5	紙本	着色	1幅
66	山紫水明処図	大正13	1924	89	32.5×133.8	紙本	墨画	1面
67	文人多癖帖	大正13	1924	89	各 27.0×17.5	紙本	淡彩	1帖

[印章]

No.	名 称	刻者	印種	寸法	材質	員数
印1～386	用印一括					384顆
印201	「山碧水明」印	頼山陽	白文方印	2.4×2.4×2.7	扶桑木	1顆
印387	「曲江観涛」印	田辺玄々	白文方印	21.0×21.0×24.5	青磁	1顆

[参考資料]

No.	名 称	制作年	員数	備 考
1	富岡鉄斎宛園田湖城書簡	大正7～13	8通の内	
2	芙蓉軒私印譜	天明5	1冊	鉄斎愛蔵本
3	趙陶斎印譜	明治5	2冊	鉄斎愛蔵本
4	山陽印影	明治5	1冊	鉄斎愛蔵本
5	渡辺華山先生印譜		1冊	鉄斎愛蔵本

・出品作品は期間中3回にわけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。

第1回 9月7日(火)～10月3日(日)

第2回 10月7日(木)～11月7日(日)

第3回 11月11日(木)～12月12日(日)

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。

9月11日・25日、10月16日・30日、11月20日、12月4日 各土曜日の午後1時30分より

・今回の展覧会にあたり貴重な作品をご出品いただきました方々、並びに種々のご協力を賜りました方々のご芳名を下記に記させていただきます(敬称略)

鳩居堂 (No.18) 辰馬考古資料館 (印201) 個人 (No.39、印387)

大阪市立美術館 思文閣 水田紀久 水野恵 藪本公三

・次回展覧会 「鉄斎の器玩」(仮称) 平成23年1月8日(土)～3月27日(日)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>

平成22年9月1日 印施